

「普通」じゃなくていい

香芝市立香芝北中学校 2年 萩原 心花

私はずっと普通でいたいと思っていた。だからみんなの前に立って発表するのがとても苦手だ。「普通でないといけない」これがプレッシャーだった。そんな自分にすごく悩んだ。時には発表がある日は一日学校を休もうとまで考えるほどだった。みんなの前に立つたびに声が震えて、自分がみんなと違うように感じてもっと嫌になった。「みんなできるのになんで私はできないの」「私はみんなみたいに普通になれないのかもしれない」と思うようにもなった。でも、どうしてそんなに「普通」でいようとするのか、自分でもわからなかった。きっと「普通」でないで陰で悪く言われそうだったからだ。みんなに「変だね」「なんか私とちがうよね」とか言われて仲間はずれにされるのが怖かった。だからいつもまわりの目を気にして、みんなと同じようにふるまおうと必死だった。

本当は自分らしくてもいいはずだとは頭ではわかっている。それでも、みんなと違うことをするのはとても勇気が必要だし、そんな勇気は私にはなかった。私はできるだけ目立たないようにして、まわりに合わせるようにしていた。そんな自分が嫌だったしなさけなかった。もっとみんなみたいに「普通」にできたらどれだけ幸せなことかと何度も思った。だから私は「普通」であり続けた。少しでもみんなと違うことをしたら悪口を言われるんじゃないか、ひとりになってしまうのではないかと考えてしまった。言いたいこともがまんして、みんなに合わせて興味がない話にも笑ったりしていた。そんな生活をつづけているとだんだん友達も増えて、自分の味方が増えたような気がした。でも、それは本当の私じゃない気もして、少し複雑な気持ちだった。笑っているのに心の中では楽しくなくて「なにに対して笑っているんだろう」と思うこともあった。友達や味方が増えたかんじがしたのはうれしかったけど本当の自分を見てもらえたわけではないから、不安は残ったし、なんとなくモヤモヤしていた。

そんな私は「普通」という言葉について考えるようになった。「普通」という言葉はまわりの人も、もちろん私も便利な言葉だと思い使っている。でも、その裏には、人によって解釈がちがう曖昧さがあるように思う。たとえば「そんなの普通じゃないよ」というひとことで、その人がどんな気持ちでそうしているのかを否定してしまうことがある。自分の基準が正しいと思いこんで、それを「普通」という言葉で押しつけてしまっているのかもしれない。

私は「普通」という言葉は、本当は当たりさわりのないように見えて、とても強い言葉なんだと思う。安心させることもできるけれど、同時に相手を苦しめることもある。だからこれからは、軽い気持ちで使うのではなくその言葉の意味や重さを考えながら、使いたい。みんなと同じ「普通」を演じるだけでなく自分にとっても「普通」を少しずつ見つけていきたいと思う。そして、みんなもそれぞれの「普通」を持っているんだと気づいて大切にしてほしい。

もし、みんなが少しずつでも「普通」を押しつけるのではなく、「人によって普通はちがう」ということを認め合えるようになったら、もっとやさしい世界になると思う。

私はまだまだ勇気もない。だけど前よりだいぶ自分を出して、毎日楽しくすごせるようになってきたと自分では思っている。毎日毎日まわりの目ばかり気にしてほんとうの気持ちを隠して過ごすのはとても苦しいことで、ほんとうは自由でいたいのに「普通じゃないね」このひとことが怖くてだからずっとまわりの「普通」に合わせるしかなかった。それでも私はこれから少しずつでも自分の「普通」を見つけていきたい。まわりと違うところがあっても「これが私」と胸を張って言えるようになりたい。怖さはあるけど自分らしく笑えるように前に進んでいくために。